

平成26年度
学校マネジメントフォーラム

信頼ある学校づくりのために
～協働による学校運営改善の取り組みから～

平成26年10月31日(金)

福井県教育委員会

福井県の教育について

全17市町



健康長寿な福井です。

学校数、事務職員数 等

平成26年5月1日現在

	小学校	中学校	合計
学 校 数	200	75 (2)	275 (2)
児童生徒数	43, 323	22, 709	66, 032
事務職員数	199	72	271

() は、分校数 : 内数

- * 事務職員の複数配置校 : 小4、中6
 - ・ 事務機能強化事務職員 2 を含む

福井型18年教育 ー小・中学校の特徴ー

1

三世代同居率日本一

家庭・地域が学校を支える

2

学年の発達段階を踏まえた学級編制

福井独自の少人数教育

3

早めの学力調査

県独自で実施する学力テスト

4

夢を育み心を耕す

小中一貫で夢応援、一流芸術に触れる

5

休み時間を利用した身体づくり

大休みを利用したなわとび・マラソン

6

学習指導要領を超えて

白川文字学

福井県独自の少人数教育

元気福井っ子笑顔プラン [H16~H23]

学年の発達段階を踏まえた学級編制



<平成26年度>

- ・学級の適正規模化策として、小学校の**学級規模の平準化**を進める
- ・国の加配を活用した県独自の少人数学級
- ・平成27年度は、小学校第4学年を40人→35人(予定)

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
25年度	35	35	40	40	36	36	30	32	32
26年度	35	35	35	40	36	36	30	32	32
27年度	35	35	35	35	36	36	30	32	32

福井型18年教育 ー小・中学校の特徴ー

1

三世代同居率日本一

家庭・地域が学校を支える

2

学年の発達段階を踏まえた学級編制

福井独自の少人数教育

3

早めの学力調査

県独自で実施する学力テスト

4

夢を育み心を耕す

小中一貫で夢応援、一流芸術に触れる

5

休み時間を利用した身体づくり

大休みを利用したなわとび・マラソン

6

学習指導要領を超えて

白川文字学

「信頼ある学校づくりのための 対応ナビゲーション」

作成のねらい

～信頼ある学校づくりのために～

- ☆ 心構えのありようの啓発
- ☆ 校内体制の改善
- ☆ 組織開発の推進

効果として期待したことは、・・・

- ① 共通理解で自信を持った対応 → 負担感の軽減
- ② 組織的な対応の在り方 → 学校運営改善
- ③ 課題の共有と解決への取り組み
→ 地域とともにある学校づくりへの足がかり

現状リサーチ・事例収集

- 所属校の管理職と相談
- 校長会・教頭会が協力
(校長会長名での調査依頼文)
- 状況把握は学校全体で
(回答責任者は教頭に)
- 対応に苦慮した事例収集

作成コンセプト

重要な
観点!!

~~クレーム対応~~
~~クレーム回避~~

- 保護者・地域住民と
共に学校づくりを！
- そのための事務機能とは？

コンセプトは **心・技・体**

心	受け入れる 気持ちの在り方	<ul style="list-style-type: none">・受容、共感・目的の共通理解
技	対応の ノウハウ	<ul style="list-style-type: none">・報告、連絡、相談・マナー・報告様式統一
体	組織体制	<ul style="list-style-type: none">・初期対応・組織体制構築・外部との連携

もっとも
大切にしたい
部分だね。

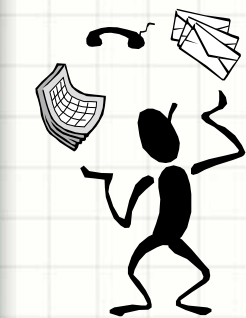


心

- * 誠実に受け止める気持ち
- * 傾聴・受容・共感
- * 目標の共通理解



技



- * 報告・連絡・相談・調整・理解
などをスムーズに行えるスキル
- * 接遇マナー
- * 報告書様式の整備
- * コミュニケーション能力の育成

体



- * 複数対応・記録整理
- * 校内での組織体制構築
- * 地教委や支援センターとの連携
- * 専門家による助言

協働して作り上げる

* 管理職・教員とともに

- 所属の管理職の指導
- 実際に事例に直面した教員と
- 校長会・教頭会の役員へ相談

* 専門家からのアドバイス

- 大阪大学大学院 小野田正利教授
監修と、事例へのアドバイス



小野田教授 寄稿文

および ワンポイントアドバイス

今回、冊子を作成するに当たり、保護者問題などで研究を続けておられる大阪大学の小野田教授に監修いただきました。

現状を把握するにあたっては、県内に事例収集を行い、多くの学校に御協力をいただきました。寄せられた事例を元に、一般的なケースとして対応したものを作成し、そこへワンポイントアドバイスをいただきました。

— 小野田 正利 教授 プロフィール —

大阪大学大学院 人間科学研究科 教授

「学校現場に元気と活力を！」をスローガンに研究活動を展開
イチャモン研究会（新・学校保護者関係研究会）代表



小野田教授の one point アドバイス

何らかの発達上の課題を抱えた子どもを養育してきた保護者にとっては、生まれてからこれまでの長い間に、世間や家族などの目を気にし、自分を責める気持ちも重ねてきておられます。育ちの上での困難さを受容できないのは、母親の無理解ではなく、現段階のありのままの不安の現れでしょう。

子どもにとっての学校ではなく、この母親の気持ちを静めるためにという保護者対応へと、軸がずれていっていることが問題かもしれません。それは、際限のない要求と応答の繰り返しになりかねません。

集団の中で、わが子が成長している姿がどうなのか、わが子が学校でどのように生活しているかを、機会をつくって何回か見に来てもらうこと（突然の来校でもかまいません、と伝えること）を通して、不安感からくる不信感を少しずつ弱めていくことも一つの方法かもしれません。